
 学 会 記 事

第46回新潟癌治療研究会演題

日 時 平成5年2月13日(土)
午後1時30分より5時まで
会 場 新潟東映ホテル
2F 朱鷺の間

I. 一般演題

1) 顎・口腔領域への転移性腫瘍10例についての検討

佐藤 光・岡野 篤夫 (日本歯科大学新潟
土川 幸三・加藤 謙治 (歯学部口腔外科
第二講座)

顎・口腔領域への転移性腫瘍は比較的稀とされており、その割合は顎・口腔領域における悪性腫瘍の約1%とされている。当科では1981年から1992年の12年間に顎・口腔領域への転移性腫瘍10例を経験したので、その概要を報告する。

症例は、男性6例、女性4例。年齢は47歳から81歳で平均年齢は59.2歳であった。原発部位別では、肺4例、乳腺3例、胃2例、大腸1例であり、病理学的分類は、腺癌7例、扁平上皮癌1例、癌肉腫1例、管状腺癌1例であった。顎・口腔領域への転移部位別では、下顎骨4例、上顎骨2例、上顎歯肉1例、頸部リンパ節1例、唾液腺2例であった。10例のうち8例が原発部位が判明した後に、顎・口腔領域への転移を認め、その時期は5例が1カ月から7カ月と比較的短期間であった。また2例は顎・口腔領域への転移が初発症状として発現したもので、どちらも肺からの転移であった。

2) 当科における口腔粘膜多発癌の検討

新垣 晋・野村 務
鈴木 克也・小林 正治
鈴木 一郎・河野 正己 (新潟大学歯学部
中島 民雄 (口腔外科第一教室)

過去25年間に当科で取り扱った頭頸部悪性腫瘍296例のうち29例(9.8%)が重複癌症例であったが今回はこのなかで口腔粘膜多発癌と考えられた10例(同時性2例、異時性8例)について検討した。

初発癌発生の年齢分布は36才から74才(平均62才)、

発生部位は歯肉4例、舌3例、頬粘膜2例、口底2例、口唇1例であり後発癌発生部位は舌、歯肉、頬粘膜がそれぞれ2例、口蓋、口峽咽頭がそれぞれ1例であった。

初回治療から後発癌発生までの期間は最短1年5ヶ月から最長15年1ヶ月に及び5年以上の長期間隔例が5例であった。

治療は初発癌に対して外科療法8例、外科放射線併用療法が2例であり後発癌に対しては外科療法7例、放射線療法1例であった。

治療後の転帰は生存7例、死亡3例であったが同時性1例が頸部、遠隔転移で又、異時性の1例が第4癌の悪性リンパ腫で死亡した。

3) 血管柄付遊離腓骨皮弁による顎口腔再建術を施行した2例

笠井 直栄・星名 秀行
鶴巻 浩・森山万紀子
武藤 祐一・高木 律男 (新潟大学歯学部
大橋 靖 (口腔外科第二教室)
柴田 実 (新潟大学整形外科)

口腔癌切除後、血管柄付遊離腓骨皮弁による顎口腔再建術(即時再建1例、二次再建1例)を施行した2例について検討し報告する。

症例1:65歳、男性。初診:平成4年3月31日。診断:右口底扁平上皮癌、T4N1M0。処置:同年4月24日、全頸部郭清術、右口底郭清、舌部分切除、下顎骨区域切除(下顎頭基部~3部)術を施行した。即時再建として、血管柄付遊離腓骨(90mm)皮弁(90×55mm)による下顎骨(骨縫合)、口底、舌再建術を施行した。

症例2:68歳、男性。初診:平成2年2月6日。診断:右下顎歯肉扁平上皮癌、T2N1M0。処置:同年3月2日、全頸部郭清術、右口底郭清、下顎骨区域切除(下顎枝~2部)術を施行、金属プレートで一次再建した。術後2年半経過した平成4年10月23日、遊離腓骨(120mm)皮弁(40×20mm)による下顎骨(ミニプレート固定)、顎下部皮膚の再建術を施行した。移植腓骨は途中で屈曲させ、ミニプレートで補強し、下顎角の形態を付与した。

4) 遊離複合組織移植により再建した手部軟部肉腫に対する患肢温存手術の小経験

山村倉一郎・堀田 利雄
平田 泰治・守田 哲郎 (県立がんセンター
小林 宏人 (新潟病院整形外科)
柴田 実 (新潟大学整形外科)

手は精巧で多様な機能を発揮するため神経、筋、腱な